

日本プロレタリア文学集・10



日本プロレタリア文学集・10

文芸戦線
作家集
1

日本プロレタリア文学集・10

「文芸戦線」作家集(一)

定価 二六〇〇円

一九八五年十一月二十五日 初版 ©

発行者 松 宮 龍 起

発行所 株式会社 新日本出版社

〒151 東京都渋谷区本町一の八の七
電話 (〇三) 三三〇一七一一
振替 東京 三一 三六八一

印刷所 光陽印刷株式会社
製本所 みさと製本印刷株式会社

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製(コピー)して配布することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

日本プロレタリア文学集・10

「文芸戦線」作家集

(一)

目次

伊藤 永之介

見えない鉾山	九
山越え	一六
山の一頁	二六
総督府模範竹林	五
平地蕃人	九三
万宝山	一〇九
濁り酒	一二五
採草地	一四九

里村欣三

苦力頭の表情 一五五

娘の時代 一五七

シベリヤに近く 一五八

旅浪の宿 一五九

旅順 一六〇

「帰ってくれ」 一六三

岩藤雪夫

畸形児 一六三

ガトフ・フセグダア 一六六

赤い灯 一六三

妹へ 一六九

鉄 一七〇

紙幣乾燥室の女工 三六

小堀 甚二

老人と寡婦 三七

避難線 三六

解 説 津 田 孝 三五

発表年月日と掲載文献 三九

伊藤永之介

見えない鉾山^{やま}

「門衛さん、俺ア鳥渡^{もつと}停車場まで行って来るして」

若い坑夫の常吉は、その時もそう門衛に声をかけたのであった。

鉾山の入口にはただ一つの門しか無かった。坑夫たちは、鉾山の出入には必ずこの門を通過しなければならぬと同じ時に、門衛に声をかけなければならないことになっていた。「また町へ活動写真でも見に行くんでねえかな」

門衛は疑わしそうな眼つきをしていた。上京するということで母の縫い直して呉れた兄の着古しの飛白^{かすり}を着て、これも兄のお古の鳥打帽を被っている弟の三吉を顧みながら、常吉はそれに答えた。

「いえこれ、三吉が東京さ行くんで送っていくのだす」

「東京、また何しに東京なんぞへ行くんだ」

「奉公にやるなです」

「奉公だって……知らない土地へ行かんでも、坑内^{しき}にいたって幾何^{いくわ}も稼げるでねえか」

蔑むような調子で門衛は言った。

三吉は赤くむくれ上った眼をしてキョトンとしていた。その眼を常吉は、弟にけどられないようにチラと見た。

何時でも濛々と立ち罩^もめている煤煙^{ばい煙}が、その眼をそんなにして仕舞わなかったら、三吉は精錬場をよさなくてもよかった。また上京する必要もなかった。何を好きこのんで知らぬ土地へやるものか。恰度^{さだ}そうして三吉の精錬場をよしたときに、町の親類から、東京の印刷工場で棲込み^{すみこみ}にして使つて呉れるところがあるという話を聞いたので、その氣になった迄のことであつた。

「東京なんぞは辛えぞ、のろまなものが樂につとまると思つたらえらい違えだぞ」

すると三吉は突然、人が何か重大なことを決心した時にする表情をあらわして言った。

「俺アいいよ、出来なかつたら帰つて来る積りだから」

「帰つて来るって、馬鹿な、それなら始ッから行くことねえでねえか。会社ではお前達の働きたいようにしてあるんだからな」

門衛は嘸鳴った。

三吉は悄気込んでしまった。そういう弟を見ると同時に、何か門衛に言い返してやりたい衝動を感じながらも、柔らかな性質の常吉は黙っていた。

「此頃よその土地へ行く若い者を見ねえ」と門衛はおっかぶせるように続けた。「碌なものは一人もありやしない、みんな碌でもない頭脳あたまになって帰って来るじゃねえかよ。お前の仲間の八重治を見ねえ」

八重治——坑夫の組合を組織しようとした結果、鉾山を追放された八重治は、その後も隣の鉾山から時々帰って来ては、潜入的に色々な仕事をして行った。門衛の声にはその八重治と最も親しい間柄であり、八重治の帰って来るときには、必ず其処の門まで迎えに出る常吉に対する強い反感の響きがあった。

（畜生、八重治が何うしたってんだ！）と常吉は心の中で叫びながら言った。

「なあに門衛さん大丈夫です、三吉はまだほんの子供のことだし」

「それがさ、東京の工場なぞに二三年も居て見ろよ、碌なことないにきまっている。八重治の仲間になる位いが落ちだよ。嘘だと思ったらその時になって見ろよ」

恰度、山長の家族が、上京中の山長と一緒にやって来るという日のことであつた。役人たちは皆トロッコに乗って出掛けて行った。そして常吉だけは、トントンと克明に枕木を踏んで歩いてゐた。坑夫はトロッコを利用出来ないことになつてゐた。

常吉は坑内しきで弟の帰って来た報告を受けた。停車場から電話がかかつて来たのであつた。上京してまだ一月にもならなかつた。知らせを受けると同時に常吉は、叩き出されるようにして鉾山の門を出たあの時の弟の姿を思い浮かべた。常吉は意外も意外だったが、門衛の言つたことが或る意味で的中したことが癪しつの種だつた。

トロ路の両側に並んでゐる長屋の前には、女房たちが姿をあらわして何か囁き合つてゐた。

停車場までは三里余あつた。一里近くも歩いたと思う頃、向うから一つのトロッコが走つて来た。

常吉はやや遠くから、その特別仕立のトロに乗っているのは、山長夫婦ともう一人の小さい男の子であることを認めた。

摺れ交うときに、常吉はピョコンと頭を下げた。トロはしかし、チラと常吉の方を一瞥したに過ぎない山長を乗せ

て走り過ぎた。

暫らくして常吉は、断崖の腹を一本の綱のように危うくつたっている路を歩いてた。またトロッコの音がして、それには着飾った山長の娘達が乗っていた。その後役人たちを乗せたトロが二台三台と続いた。

常吉は線路の傍に身を避けながら、若しや三吉が乗せて貰つてはいはないかと、急がしく眼で送り迎えた。しかし勿論三吉の姿は見えなかった。何時もならば、役人たちに一々お辞儀する筈の常吉もムツとした表情を浮かべながら突ッ立っていた。そういう常吉を嘲るように、トロッコは轟然と唸りながら走り過ぎた。

常吉の顔は汗で硬張っていた。停車場近く辿りついたときには、西陽は地に長い影をひいていた。

可なり遠くから常吉は、停車場の入口の柱に凭れて立っている弟の姿を認めた。

それは烏打帽も被っていないければ、出発のとき着更えや何やら入れてやった風呂敷包も持っていない三吉の姿であった。

常吉はある不安に肚胸をつかれた。

汗を拭きながら常吉は駆け寄った。そして叫んだ。

「三吉、帰って来たかよ」

三吉は心持ち顔を上げた。何とも言わなかった。それはハキハキ物を言う性質の三吉に似合わないのを常吉は感じた。

眼は矢張り赤くむくんでいた。三吉は何か言いたげに口を歪めたが、そのまま深く首垂れてしまった。

その様子は何か悪いことを仕出来した人間の様子に似ていた。常吉は何か言つて弟を慰めようと思った。しかし何も言うことが出来なかった。

よく見ると、その眼は一層悪くなったようだった。ただのむくれ様ではなかった。三吉はその赤く爛れた眼を、すべての光りと明るさを拒むように、固く閉じていた。

「三吉、烏打帽何処へやって来たばあ」

「知らねえ」

「風呂敷何処へやったけな」

「分らねえ、上野停車場だべえ」

可なり永い間に二人はこれだけ言った。

柱に凭りかかったまま三吉は身動きもしなかった。

「さあ、日の暮れねえうちに帰るべえ、お前の帰ったことお母ア知らねえだからなあ」

と暫らくして常吉は言った。それでも三吉は動かなかった。常吉は三吉の蒼ざめた頬が時々ピリピリと痙攣するの

を認めた。

「さ遅くなるから機嫌直して行くべえ」

と言いかけて、常吉は弟の肩に手をかけながらその顔を覗き込んだ。

「三吉、どうしたけな、お前何処が悪いでねえかな、どうしたけな、悪かったら悪いと言わねば仕様がねえで」

すると三吉の唇を漏れた次の言葉が、常吉の脳天を打った。

「俺あ盲目になったのだ」

その言葉は低かった。常吉の眼尻からは涙が流れ出して、それは弟の肩に置かれた常吉自身の荒れた武骨な手に降らなかった。

常吉は弟の手をひいて歩き出した。

「お前、その眼痛むでねえかな？」

「少しばかりでねえだよ、千切れるように痛むだあ」

それでも三吉は元気に歩いた。

しかしトロ路が悪くなるに随って、三吉の様子はひどく臆病になった。上り下りのあるトロ路に這入ると、枕木の間隔もひどく不規則になり、石コロが沢山転っていた。

三吉は枕木や石コロに躓いて何度も倒れた。起き上ると前より一層ものに怯えた様子で歩き出した。

「我慢して歩けえ、帰ったらゆっくり寝るべえからなあ」

常吉は何度も何度もそう言っただけに全神経を集めている様子で、少しでも歩調を早めようとあせった。そしてそのために躓いたり爪先を打ったりした。苦痛はその血の色のまるで無い小さな顔一杯にあらわれた。

「ゆっくり歩こう、どうせ夜間になること分ってるからなあ」

常吉はまたそうも言った。

フト三吉は何か思い出したように立ちどまった。

「先刻、役人あど、みんなトロさ乗って行っただけなあ」

「うむ」

まだ一里も来ていなかった。三吉の乗っていた列車には山長の一行も乗っていた筈であった。自分たちはこの先こうして二里余も歩かなければならないのに、三吉に一瞥も呉れなかったに相違ないその一行は、既う目的地に着いてしまっているに違いなかった。常吉は、先刻役人達のトロッコに、若しや三吉が乗せて貰って居はしまいかと思つたことを思い浮かべた。チェッ、あんな奴等に、そんな期待を持つことが抑抑間違いだっただけ——と常吉は心の中で

叫んだ。

「三吉、お前は眼が潰れたんでやめさせられたのだべえ」

常吉は恐ろしいものに触れでもするようにそう訊いた。

「うんにゃ……」と三吉は潰れた赤い眼をあげて言った。

「やめさせられたときはまた見えていたどもなあ、それから直ぐに潰れたんだあ……」

歩くだけの事で一杯になっている三吉は、時々思い出したように話した。話すときには兄の腕をグッと後ろに引ッ張つて立ち停つた。常吉はそういう弟の新しい癖を悲しげな眼で眺めやうとした。

——門衛の言うのろまな三吉は、傭主を満足させなかった。三吉は事ごとに叱り飛ばされこつき廻わされた。のみならず眼は悪くなる一方であつた。三吉は全く用が足りなくなつてしまつた。工場の主人は、三吉の全然失明する間際になつて、予告もなく手当もなく、電車切符一枚呉れただけで、三吉をボンと往来に突き出してしまつた。上野駅の待合室のベンチの上に一日寝ている間に、三吉の眼は坑内のように暗くなつてしまつた。そこへ或る人が三吉の行先を訊ね、風呂敷包みを探して呉れた——ベンチの上で烈しい眼の疼痛のために藻掻いている間に、風呂敷包は何処かへ紛失してしまつていた。——その人はやがて三吉に切

符を買つて呉れ、その上に汽車へも乗せて呉れた。その人も同じ列車に乗つた。そして米沢辺で、車掌に三吉を托した上で降りて行つた。三吉の話しから推量すると、その親切な人は休暇で郷里へ帰る横須賀あたりの水兵らしかつた。暫らくして三吉は俯向けていた顔をあげた。

「兄ちゃ、お日様照つてるべかなあ」

「うむ、今日倉山（くらやま）のかげさかくれるところだ。杉の木さかかっているぜえ」

常吉はそう説明しながら、目倉山と言つた自分の言葉にハツとして、チラと弟の顔を顧みた。

だが三吉はまた言つた。

「兄ちゃ、東京は明るいとかだでえ」

三吉の頬には無邪気な微笑みさえ浮んでいた。煤煙のために殆ど太陽を見ることのない鉾山（ほこやま）の外知らなかつた三吉にとつて、それは実感だつた。だが三吉の眼は潰れてしまつていた。

常吉は心の底から叫んだ。

「俺ア悪るかつたなあ、三吉、東京へなんぞ行かなければよかつたになあ」

三吉は答えなかつた。

永い間二人は無言のまま歩き続けた。

——常吉にしても好んで三吉を上京させた訳ではなかった。すべての坑夫は多かれ少なかれ眼が悪いと言ってよかったが、就中煤煙のムツと鼻を突く臭気で、息の詰りそうな熔鉱炉のそばに、日がな一日働いていたのでは、三吉の眼は鑷子の眼玉同様に腐る一方であつた。そればかりではない。建物の材木さえもボロボロに腐っているほどの精錬場では、まして人間の生身の堪まろう筈がない。大抵の人間が五年位いであまりしてしまふのを知っている常吉は、僅か一年足らずですっかり血色を奪われてしまつた三吉を、思い切つてよさせた。其処へ恰度、町の親類から、東京の工場で棲込みの小僧につかつて呉れるという話を聞いたので、身体の弱い三吉の爲めには、まだしもその方がいくらか生存に適しているような氣もして、早速話しを決めて貰つたのであつた。それには先ず眼の療治をする必要があつたが、万事は役人の家族本位になっているやまの病院ではそれも望みなかつた。病院では患者の診療は、役人の家族が優先権をもつていて、この習慣に馴らされた坑夫や坑夫の家族は、どんなに早く行つたときでも、何時間でも神妙に待つていた。最初三吉の一人行つたときは、例に依つて最後まで待たされた三吉は、——これ位の眼は坑夫の間では普通だ、それを一一治療している暇も設備もない——

という理由にならない口実で、そのまま突ッ返されて来た。そこで常吉が出掛けて行つてやつと目薬だけは貰つて来た。その目薬は、その目薬という言葉が約束するだけの効き目はあつたが、それ以上三吉の眼をよくする爲めに町の医者に通わせることは、常吉一家の生計のみならず、通うことの不便と困難からも見込みがなかつた。——「やまに居たからつてよくなる訳ではないしなあ、こんな煙くせえとこに居るよりも、東京さ行つた方が却つていいかも知れねえんでなあ」と母の言うことにも、常吉は道理があるような氣がした。——そのとき常吉は、三吉が暇を告げて家を出るときに、病院から貰つた薬の残っている瓶を、あわてて風呂敷包みに入れた母の姿を思い出した。

「兄ちゃ、やまの煙出し見えるかあ」

黒松の生えた低い山裾をつたつて、その向う側に出ると同時に、遙か遠くに鉱山の大煙突から吐き出される煙が空を濁しているのが見えた。やまから町への行き還りの習慣でそれを呑み込んでゐる三吉は、其処まで来るとさう言つた。

常吉は弟が盲目になつたことを、強く意識しない訳には行かなかつた。

「うむ、見えるよ」